

コナン・ドイル「唇のねじれた男」ノート

——探偵小説翻訳史稿(2)——

吉田 司 雄

一

日本における最初のシャーロック・ホームズものの紹介は、明治二七（一八九四）年の「乞食道楽」だとされている。雑誌「日本人」の一月三日の第六号、一月十八日の第七号、二月三日の第八号、二月十八日の第九号と四回にわたって「明窓浄几」欄に掲載されたこの作品を発見したのは、畑實「シャーロック・ホームズの訳「乞食道楽」について」（「文学年誌」第六号、一九八二・四・二五）であった。この発見以前、本邦最初のホームズものはもつと後の作品だとされていた。

昭和一〇年、木村毅は「新青年」の新春増刊号に寄せた「ホームズ探偵伝来録」（のち『青燈隨筆』、一九三五・一〇・一八、双雅房）で、明治三三年九月十日発行の「文芸倶楽部」の小説欄の四篇のタイトルを挙げ、「この中に、少くとも私の眼に触れた限りでは吾邦最初のホームズ物の翻訳があるのだ。」として、原抱一庵「新

陰陽博士」を紹介した。「倫敦通信」という角書を有し、「倫敦より啓上」と題して「豫て珍聞もあらば速かに報道せよとの貴下の委嘱」に應える形で「ホウムス博士」を紹介しようと、「余が年来の知友なる英国の医家エッチ、和杜遜氏より一冊の筆記に添て新春早々寄せ到れる一翰」だという趣向を凝らしたこの作品には、原作の表題も原作者コナン・ドイルの名もどこにも記されていないが、ホームズものの第一作『緋色の研究』の翻案である。

続いて昭和一二年四月、柳田泉が「探偵春秋」に連載中（前年二月からこの年の八月）の「隨筆探偵小説史稿」（のち『統隨筆明治文学』、一九三八・八・五、春秋社）で、「新陰陽博士」の前年、明治三二年の「中央新聞」（七・一二・一一・四）に、南陽外史（水田栄雄）が「不思議の探偵」の総題で『シャーロック・ホームズの冒険』のほとんど全部を翻案していることを、そのいきさつも交えつつ指摘した。「南陽外史のドイル紹介は、ドイル紹介の最初であるのみならず、我が国の探偵小説がフランス物から英国物に

と移る一線を画したものととして、これ亦、探偵小説史上、重要視すべき一事実だ。」と、柳田はその意義を高く評価している。翻案のタイトルは以下の通りであった。

- 「毒蛇の秘密」 (七・一二〜二二)
- 「奇怪の鴨の胃」 (七・二三〜三〇)
- 「帝王秘密の写真」 (七・三一〜八・七)
- 「禿頭倶楽部」 (八・八〜一四)
- 「紛失の花婿」 (八・一五〜二〇)
- 「親殺の疑獄」 (八・二一〜二九)
- 「暗殺党の船長」 (八・三〇〜九・二二)
- 「乞食の大王」 (九・三〜一二)
- 「片手の機関師」 (九・一二〜二〇)
- 「紛失の花嫁」 (九・二一〜二七)
- 「歴代の王冠」 (九・二八〜一〇・一、一〇・二一〜二六)
- 「散髪的女教師」 (一〇・二七〜一一・四)

戦後も、中島河太郎は「寶石」誌上に連載した「日本推理小説史」の第六章 探偵実話とホームズの移入 (一九六二年六月号) で、柳田泉の研究を踏まえつつ、南陽外史「不思議の探偵」、原抱一庵「新陰陽博士」、さらに木村毅が紹介済の三作品、森嶋峰「モルモン奇譚」(「時事新報」一九〇一・一一・四〜一九〇二・一二・二九)、小栗風葉「神通力」(「読売新聞」一九〇六・一一・一三〜一二・八)、勝間舟人「鼻眼鏡」(「文芸倶楽部」一九〇八・一二)の順で論を進めている。先の二作品は「新陰陽博士」と同

じく『緋色の研究』、「鼻眼鏡」は「金縁の鼻眼鏡」の翻案である。

しかし、『日本推理小説史』第一巻(一九九三・四・三〇、東京創元社)に収められた際、「それ(『不思議の探偵』)引用者註)より一足早く、『毎日新聞』の四月十六日号から七月十日号まで、無名氏訳の「血染の壁」が連載されていることを、新井清司が指摘した。「緋色の研究」の翻案で、人名も日本名に改めてある。

南陽外史の「不思議の探偵」はその終了後二日経った十二日から十一月四日まで、「中央新聞」に連載されているから、ホームズ紹介の先鞭をつけたのは無名氏ということになる。」との一段落が挿入された。新井清司の指摘というのが具体的にいつどこでなされたのかは記されていないが、『名探偵読本』シャーロック・ホームズ(一九七八・一一、パシフィカ)に収められた新井清司「明治期におけるドイル移入史―ホームズを中心として―」には確かに「血染の壁」が挙げられている。のみならず「南陽外史は、『緋色の研究』を紹介しようと考えていたが」「『緋色の研究』が他紙(誌)で紹介されているのを見て」「シャーロック・ホームズの冒険」という短篇集である「不思議の探偵」を紹介したのではないだろうか。」という「推理」が記されている。だが、この段階では当然ながら、「乞食道楽」の名前は記されていない。

現時点で最も詳細なドイル移入史の整理は、『明治翻訳文学全集《新聞雑誌篇》8 ドイル集』(一九九七・四・二七、大空社)の巻末に収められた「明治翻訳文学年表(ドイル篇)」(川戸「道

昭」・榎原「貴教」編）、およびパシフィカ社の『名探偵読本』シャーロック・ホームズ』を改訂増補した『優雅に楽しむ新シャーロック・ホームズ読本』（二〇〇〇・五・一七、フットワーカー出版社）に収録された改訂稿「明治期における Doyle 移入史——ホームズを中心として——」であろう。前者『Doyle 集』の最初に収録され、年表の最初にも記された作品が「乞食道楽」であり、後者において新井清司もはつきりこう書き加えている。

さて、昭和五十七年になってホームズ翻訳史を大きく変える研究が出た。畑實氏が雑誌「日本人」を調査中に、明治二十七年一月～二月にかけて連載されていた「乞食道楽」がホームズ物「唇の振れた男」であることを突き止め、「文学年誌」（六号）に発表した（「シャーロック・ホームズの訳『乞食道楽』」^{マヤ}）。これが現在のところ本邦初訳のホームズものである。

それでは、日本最初のホームズものの翻訳「乞食道楽」の世界を少しでも覗いてみよう。

二

「乞食道楽」の原作にあたる「唇のねじれた男」（“Man with the Twisted Lip”）は、一八九一年二月に「ストランド・マガジン」に発表された作品である。翌一八九二年一月からは「ストランド・マ

ガジン」でホームズものの短編連載が開始され（六月完結）、それ以前に発表されていた六編と併せた十二編が最初のホームズものの短編集「シャーロック・ホームズの冒険」を刊行、さらに二月からは第二短編集「シャーロック・ホームズの回想」に収められる短編の連載も開始された。これらの短編が好評をもつて読者に受け入れられ、ホームズ人気は急速に高まっていた。「唇のねじれた男」もそうした初期短編群中の代表的な一編である。

ここでは、延原謙の翻訳「唇の振れた男」（新潮文庫版『シャーロック・ホームズの冒険』、一九五三・三・三一、改版一九八九・五・三〇）から冒頭を引いてみる（「唇のねじれた男」の引用は、以下も同書に拠る）。

セント・ジョージ神学校の校長だった故神学博士イライアス・ホイットニー氏の弟にあたるアイザ・ホイットニーはひどくアヘンに感溺していた。この悪習はそもそも学生時代の愚かな好奇心がこうじて、ついに身にしみてしまったものだと私は承知している。というのはド・クインシーの描写した夢と感覚の世界をのぞきみてから、おなじ効果をうるつもりでタバコをアヘン・チンキにどっぴりつけては喫んでいた。こうして染まることはたちまち染まってしまったが、彼もまたご多分にもれず、この悪習から容易に脱することができなかった。そして長年この麻薬の奴隷となりとおし、朋友親戚間のひんしゆく・指弾の的となったのである。いまでは黄いろくぼってりした顔になり、眼瞼は力なく垂れ、瞳

孔は針の穴ほどになり、いつも椅子のなかに丸くなっていて、貴族紳士の一廃物としての残骸をとどめているにすぎない。

それでは、明治二十七年の「乞食道楽」では、冒頭部分はどうのように訳出されただろうか。

セントゼオード大学にて地質学に名を得しエリアスホイットニイの兄弟にてアイサホイットニイといひしは甚しく阿片烟に耽り家をも身をも忘るゝに到れりかゝる慣習を生せしもとはわけもなき戯よりのことにてかのクインシーの人種談を読みてタバコをラウダニウムにて取換て試みしに初り今は其嗜好は益つのり實際これをやむることはかたくこれを遂るはやすしといふへき場合に陥りその朋友親族の畏懼と悲哀との中にありてこの毒物の奴隷となり果たり其顔色じゃ黄ばみて板目紙のことく臉は眼を掩ひて僅かに針のとき眸子常にのみもたれて貴人の風症に中れることし

すでに繰り返し指摘されていることだが、「乞食道楽」の訳文の特徴は、明治期のホームズもの受容において一般的だった、人名などを日本風に置き替える翻案のスタイルではなく、原文に忠実な逐語訳となっている点だ。と同時に、現代の翻訳と読み比べてもすぐわかるように、誤訳がたいへん目立つ。畑實「シャーロック・ホームズの訳「乞食道楽」について」が指摘したものを幾つか挙げると、例えば「神学博士イライアス・ホイットニー氏」が「地

質学に名を得しエリアスホイットニイ」となっているが、これは原文の「Theological (神学の)」を、「Geological (地質学の)」と勘違いしたものである。「クインシーの人種談」という箇所は、原文は「ド・クインシーの描写した夢と感覚の世界」(De Quincey's description of dreams and sensations)となっており、言うまでもなく、トマス・ド・クインシーの自伝『阿片常用者の告白』(一八二二)のことを指している。訳者は明らかに、この高名な著作を知らなかったのであらう。

だが、このド・クインシーという名前こそは、ロンドンのアヘン窟を舞台の一つとするこの短編の導入部に不可欠とも言っているのだった。衆知のように、シャーロック・ホームズもののほとんどはワトソン博士の手記という一人称小説の形で書かれている。作品冒頭でワトソンは、「ド・クインシーの描写した夢と感覚の世界」に引き込まれてしまったアヘン中毒患者を探しに、ロンドンの東のはずれ(イースト・エンド)、ロンドン・ブリッジの下手の北岸に並ぶ高い荷揚場の裏にある「上スワンダム小路」を訪ね、「既製服屋と居酒屋のあいだの急な段々を、洞穴の入り口みたいな暗いところへ降りてゆく」。そして目的地のアヘン窟の前で馬車を待たせると、「中ほどの凹んだ石段を降りてゆ」き、「どすぐろく濁ったアヘンの煙がもうもうとたちこめている」アヘン窟の内部へと入ってゆく。その場面を「乞食道楽」から引用しよう。

予が勇往せし一路何の故障もなくスウアンタンランの上手龍動橋

の東方川の北側にて高き物揚場あるうしろ陋しき小巷出来合服の舗とデン酒屋の間の往あたりに住古穴居の名残りともあやしまるゝ穴のとき戸口よりだら／＼下りの石段これ予か搜索を要する所なり即大膽にも馬車を表にまたせをきて踏くほめたる石段を酔人の歩むかことく一步／＼に身の中心を保ちなから踏しめ／＼下り行戸口の上にある油燈の閃く先をたよりに奥深く入込て見れば低き坐敷の一間阿片の烟深くこめて移住民を運搬する船の甲板のこつく板にて張たるのみにて地氈の布きあるも見ず其幽暗なる所に己かじ、肩を枉け臂を彎し頭を下に頸を上の様々のなりして臥しおる人々の前に小さき紅の輪をなせる火光の間より今来れる我をすかし見て怪しめるもの、ことしこれなんかの毒物を金属の管の雁首に燃す料に具る燈なりけり渠等は何事かさ、やくあるもことの外に声低くはなしに尻声なくてきく能はさりしか其行つまりの所には木炭を熾しある銅器ありて三叉をなせる木もてこれを支へたりそこには背高く瘡ほうけたる老人のその頸を膝の上に曲たる奴の手の上に安しこれに向ひ居たるもあはれに見ゆ予かこゝに入るや淡黄色なる番頭マレイ人と覺しくか急き烟管を手渡してあきたる椅子の方に案内す

「阿片の烟深くこめて」いる「幽暗なる所」にうごめくアヘン吸引者たちのおぞましげな姿をみるワトソンに「マレイ人と覺し」き「淡黄色なる番頭」がパイプを手渡す。「淡黄色」という色は、ワトソンが搜索するアイザ・ホイットニーが「毒物の奴隷となり果た

り其顔色じゃ黄ばみて」しまつていたという記述を思い起させるだろう。延原訳に言う、「黄いろくほつてりした顔になり、眼瞼は力なく垂れ、瞳孔は針の穴ほどになり、いつも椅子のなかに丸くなつていて、貴族紳士の一廢物としての残骸をとどめているにすぎない」の姿を。「黄いろい顔」とはアヘン中毒者のしるしに他ならない。

と同時に、「顔いろの黄いろいマレー人の給仕」という表現において「黄いろ」は、白色人種のイギリス人とは異なる有色人種のアジア人としての特徴を指し示しているようにも思われる。「唇のねじれた男」には、「凶悪無頼の経歴をもつ無頼の徒」である「水夫あがりのインド人」も出てくるが、アヘン窟とはまさにそうした得体の知れないアジア人が暗躍する闇の世界として描かれている。アヘンとアジアとは、「黄いろい顔」に取り結ばれるかのように、紛れもなく隣接関係に置かれているのだ。

このことはロンドンにおけるアヘン窟の登場の仕方とその後のイメージの変質とも関わりがあろう。マーティン・ブース『阿片』（田中昌太郎訳、一九九八・一一・七、中央公論社）によれば、イギリスでは一八世紀になると乗船待ちの水夫たちがつくる中国人コミュニティが作られ始め、とりわけ、ロンドンのイーストエンドの、波止場に近いステップニーとボプラ地区の二本の街路、すなわちベニーフィールズとライムハウス・コーズウェーには数は少ないながらも中国人住民が集中するようになり、中国人専用のアヘン窟も幾つか作られたのだと言う。だが、「東洋人以外で阿片窟に入る

者は滅多にいなかった」。例外的に侵入したセンセーショナルな新聞の記者たちによって、「阿片窟は卑しく、みじめな場所として受けすけに描かれたが、邪悪とは見なされなかった。そこは好奇心の対象であり、阿片の喫煙は中国人のエキゾチックな弱点以上のものとはほとんど考えられていなかった」。

だが、一八六八年の薬局法制定、阿片取引禁止協会の設立あたりを境に、「世論が影響され、阿片を何か邪悪なものと同じ一視するようになった」とブースは指摘している。そしてそうした傾向を定着させるのに力のあった文学作品として、「退行と基本的な人間の価値の放棄と品性の腐敗の象徴」としてアヘンを「激しく弾劾」して「阿片と阿片窟への不寛容な態度を導入」したチャールズ・ディケンズ『エドウィン・ドルードの謎』（一八七〇）、「人の内面の悪の劇的で冒瀆的な暴露の舞台」にアヘン窟を用いたオスカー・ワイルド『ドリアン・グレイの肖像』（一八九二）と並べて挙げているのが、この「唇のねじれた男」なのである。とするならば、アヘンを「邪悪なもの」とみなす延長上において、アヘン窟には元々は彼らしか出入りしなかったという「中国人」「東洋人」のイメージも必然的に「邪悪なもの」へと連なっていく。「顔いろの黄いろいマレー人」や「水夫あがりのインド人」とは、文明からはずれた「腐敗」や「悪」を形象化した存在だったとも言えるだろう。

このような作品として「唇のねじれた男」を捉え直す時、日清戦争開戦前夜の明治二十七年一、二月に、国粹主義的な主張を展開していた政教社の雑誌「日本人」に記載された意味もはつきり見えてく

と思う。無名の訳者の真意は知りようもなく、また「乞食道楽」には「マレー人と覺し」き「淡黄色なる番頭」、「東印度人を卑しむ名目」と注記される「狡猾者のラスカル」「悪者ラスカル」なる人物の二人しかアジア人は登場しないが、当時の読者がアヘン窟の場面の彼方に「中国人」のイメージを読み取った可能性は少なくないと思われるからである。そしてその点からみれば、「クインシーの人種談」という一語も、単なる誤訳としてのみ片付けられない面さえ感じられるかも知れない。

中国では、一七世紀にはアヘン喫煙の風習が広く根付いており、一七二九年には最初の吸煙禁止令が出されてもいた。だが、なかなか止むことのなかったその風習につけ込むかのように、一七五七年インドのアヘン専売権を獲得したイギリス東インド会社は、当時イギリス本国で飲茶が流行し始め需要超過となった中国茶の買い付け資金を得るために、中国へのアヘン輸出を激増させた。以後、代々密輸貿易とアヘン中毒の蔓延に手を焼いてきた清朝政府であったが、一八三九年ついに道光帝は林則徐を特別監督官として広州に派遣、アヘン貿易の根絶をはかろうとした。その結果として起ったのが一八四一年から四二年にかけてのアヘン戦争であり、敗北した中国は不平等で屈辱的な南京条約の締結を余儀なくされ、ヨーロッパ列強の実質的な植民地的支配を受けることとなった。いったい。

こうした近隣の大国の運命に対して、当然同時代の日本人も無関心ではいられなかった。幕末期からアヘン戦争に関する情報が数多くもたらされていたことに関しては、増田渉『西学東漸と中国事

情』(一九七九・二・二二、岩波書店)、王曉秋『アヘン戦争から辛亥革命—日本人の中国観と中国人の日本観』(小島晋治監訳、一九九一・一二・一〇、東方書店)などに詳しいが、そうした情報の集積を基に、中国の二の舞を踏むまいというのが当時の日本の進路であった。明治維新後の新政府が、明治三(一八七〇)年に阿片煙禁止の布告を出し、明治八年には薬用阿片の取締法を出したのも、そうした意識の現われとみることができるだろう。

そして明治二十七年から八年、ヨーロッパの帝国主義の力と彼らが持ち込んだアヘンとに深く侵され、瀕死の状態にあった中国と、日本は近代最初の対外戦争を戦ったのである。かつその戦勝によって台湾を植民地として領有した日本政府は、今度は台湾アヘンを専売化し、さらに日露戦争後は関東州でも専売化することで植民地経営、大陸侵略の資金を捻出してゆくこととなる(詳しくは山田豪一編著『オールド上海阿片事情』(一九九五・七・一五、亜紀書房)所収の編者による「日中阿片小史—序にかえて」を参照のこと)。

近代日本において、アヘン中毒やアヘン窟は中国人と密接に関連づけられ続けた。ここでは最後に、「乞食道楽」掲載から三年後の明治三〇年一月、春陽堂発行の雑誌「新小説」の臨時増刊「初日之出」に、懸賞小説の番外当選作として掲載された「烟鬼」という作品の一場面を引いておこう。「上海法租界」の「黄浦江」に臨みたる大通りを「虫の這ふ様によた／＼と歩来る一個の乞食らしき支那人」の描写である。「誰の眼にも鴉片を激しく嗜みて今や身を滅ぼさんとする、鴉片の癮者なる」彼のことを、人々は「烟鬼」と

呼ぶ。

肉は落ち骨は現に、嘗て湯に浴りし事も無きと覺しく、堆れる垢は恰も松の樹の皮見るらん様なるを、衣服としては唯一枚の破れたる馬褂と袴子に僅腰の辺をかくしたるのみ。靴も穿かず、帽子も戴かず、蓬々と生えたる髪も剃らず、何時梳りしか塵に白うなりし弁髪は鼠の尾の如く悄然と後に垂れ、手には大なる阿片喫むべき管を持ちたり。年は猶卅の上二つ三つを越えたらん程なるに、背は猫の背の似く前へ屈み、眼はきよろ／＼と異様な光を放ち、顔色蒼白く見るから可怖しき——

作者は若き日の永井荷風。彼の母方の祖父、鷺津穀堂は、アヘン戦争について詳述した魏源『聖武記』十四巻を抜粋し翻刻した『聖武記採要』を刊行したが、幕府によって板木を取り上げられ絶版を命じられた人物でもあった。

〔付記〕本稿ではこの後、南陽外史「不思議の探偵」中の「乞食の大王」と比較し、ロンドンの金融街シティの問題に及ぶはずであったが、果たせなかった。他日を期したい。なお、次稿ではウィルキー・コリンズ『月長石』(『The Moon Stone』)の翻案である省庵居士(森田思軒)、原抱一庵『月珠』を取り上げる。これもアヘンと関わりの深い作品である。

(本学助教授)